

# 健康高齢者の人あたりの良さに関する介入研究

Intervention study on suavity of healthy elderly adults

石川真理子<sup>1)</sup>・孫 琴<sup>1)</sup>・高木千都<sup>2)</sup>・高橋伸子<sup>1)</sup>・宮田正子<sup>1)</sup>・坂口佳江<sup>1)</sup>・吉村昌子<sup>1)</sup>

Mariko Ishikawa,<sup>1)</sup> Sunqin<sup>1)</sup>, Chisato Takagi<sup>2)</sup>, Nobuko Takahashi<sup>1)</sup>, Masako Miyata<sup>1)</sup>, Yoshie Sakaguchi<sup>1)</sup>, Masako Yoshimura<sup>1)</sup>

(立命館大学<sup>1)</sup>・アプリシエイトグループ株式会社<sup>2)</sup>)

(Ritsumeikan University<sup>1)</sup>・Appreciate group Corporation<sup>2)</sup>)

key words: 健康高齢者・学習活動・コミュニケーション

## 目的

これまでの先行研究において、学習活動（音読・計算を反復遂行すること）により、健康高齢者の認知機能の様々な側面の改善あるいは維持することが明らかになってきている。しかし、日常生活という側面からの介入研究は、極めて少ないのが現状である。そこで、本研究では、学習活動に参加した健康高齢者の主観的評価を得るために、人あたりの良さの尺度を用いて、6ヵ月間学習活動を遂行することにより、健康高齢者のコミュニケーションに変化がみられるかどうかについて検討することを目的とした。

## 方法

### 実験参加

2009年6月～2009年12月までの6ヵ月間で、立命館大学人間科学研究所の高齢者プロジェクトで行われた学習活動に参加している地域在宅高齢者38名（男性10名、女性28名、平均年齢75.2歳）であった。実験参加者は全員健康である。

### 質問紙尺度

人あたりの良さ尺度は、全35項目あり、最高得点は170点である。同調性、印象管理、打ち解け、機知性解読、客観性、素直さ、自己抑制、情緒安定の9因子で構成され、A3用紙1枚に印刷し、学習者自身の考えを回答するように求めた。回答に際して、各項目について「そう思わない」、「あまりそう思わない」、「どちらとも言えない」、「まあまあそう思う」、「そう思う」の5件法で求めた。

### 要因計画

3要因混合分散分析を計画した。グループ間（低群・中群・高群）×テスト時期（プレ・ポスト）×居住形態（独居・同居）の3要因計画である。

### 倫理的配慮

研究を開始する前に、本人に介入研究の目的と安全性について説明を行なったのち、書面による同意を得た。

## 結果

得点群および居住形態別の質問紙合計得点の変化について図1、図2に示した。プレにおける質問紙の合計得点について、標準偏差に基づき、対象者を得点低群・中群・高群に分類した。その上で、グループ間（低群・中群・高群）×テスト時期（プレ・ポスト）×居住形態（独居・同居）の3要因混合分散分析を行った結果、群間得点群の主効果（ $F(2, 32)=29.538, p<.01$ ）がみられた。時期の主効果（ $F(1, 32)=6.225, p<.01$ ）も有意であったが、居住形態の主効果（ $F(1, 32)=2.710, n.s.$ ）はみられなかった。居住形態と時期の

交互作用は有意な傾向があった（ $F(1, 32)=3.629, p<.10$ ）。

MMSE 得点、FAB 得点、質問紙の合計得点、各因子の合計得点のプレとポストの変化率を（プレ/ポスト）により算出し、各項目間の相関係数を示したものが表1である。MMSE 得点の変化率と FAB 得点の変化率との間にはやや強い正の相関がみられ（ $r=.448, p<.01$ ）、MMSE 得点の変化率と自己抑制の変化率において、やや

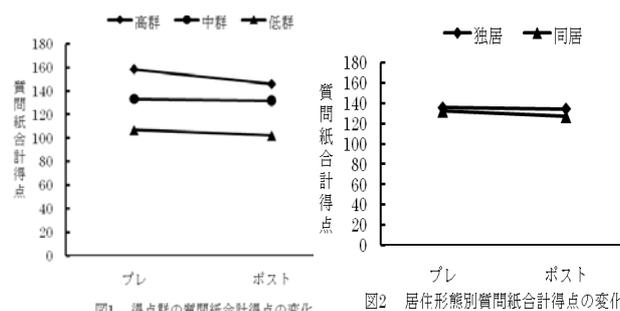


表1 MMSE, FAB, 9因子の合計得点および各因子得点の相関

	9因子合計	同調性	素直さ	自己抑制	機知性	客観性
MMSE	.190	.076	.008	.404*	.200	.109
FAB	.178	.136	.104	-.139	.180	.207
	印象管理	情緒安定	打ち解け	機知性	FAB	
MMSE	-.161	.175	.246	-.190	.448*	
FAB	.153	.024	-.083	-.164		

\*\*  $p<.01$ ; \*  $p<.05$

## 考察

検定結果より、学習活動に参加することで、全体的に人あたりの良さが低下したことになる。群間で比較すると、高群の得点が有意に減少したことから、高群では特に平均回帰傾向がみられたものと思われる。さらに図2より、住居の形態によって、変化の仕方が異なることが分かった。同居群の得点の減少が独居群よりも顕著であることから、学習活動に参加することで、特に家族に対して自己主張を明確にする傾向が増加した可能性がある。また自己抑制の変化とMMSEの変化に正の相関がみられることから、認知能力の変化と自己抑制は強く関連していることが推察された。今後さらに、自己モニタリング能力の問題とともに、長期間の学習活動による社会的スキルがどのように変化するかを継続的に分析していきたい。

## 参考文献

菊池章夫・堀毛一也(1994). 社会的スキルの心理学 川島書店